

編集後記

雑誌名	日本文学誌要
巻	34
ページ	110-110
発行年	1986-06-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019465

編集後記

◆チャレンジャーが空中爆発した。誠に痛ましい事故であった。チャレンジャーの構造がどうなのか興味があったので、いろいろの人の解説に耳を傾けた。特に柳田邦男氏の解説に聞くものがあった。話の中に幾度となく出て来る「けれど」というのが、何となく耳ざわりになる。それ以後この言葉についての共通点を探ってみた。ある人は「けれど」というし、また「けども」というものもある。とっても「けれども」と従来の言葉使いもある。辞書を見ると「けれど(も)」として、後の文が前の文と逆の関係にあることを示す、(だが、しかし)というのと、接続助詞として「けど(も)だがしかし」というのと区別されている。

話言葉として使っている時には相手の動作や言葉のリズムによって、厳密に使い分けしなくともわかるが文字にした場合にどこまで正しく使いわけているのであろうか。

「けれど(も)」は昭和五十七年版の辞典にあり、昭和十三年のものには「けれども」で出ているから、四十五年ぐらいの間に変化

していたのであろう。すると「けれど」は変わったが「けども」の方はどうなるのである。言葉は時代とともに変化して行くから、地方別に、さらにその中のグループ別に少しづつ変化する。

するとどうしても方言と係わるようになる。浅草っ子の久保田万太郎作品の言葉に、同じ東京生れ下町育ちの池田弥三郎氏が読んでわからない言葉があるといっていることを、岩淵悦太郎氏は『日本語を考える』のなかに記している。このように東京方言の中でも、さらに細かく分れていることがよくわかる。そして、さらに年代別でも変わってゆく。例えば『蝶』を辞典でみるのに「ちょう」で出ているが。古いことばの「てふ」は古語の『てふ(という)』とあって、平安朝期の言葉の面影を察することはできない。

この様に古い言葉はすこしづつ変化しているが、未だに『どぜう』と古きを守っているところもある。

年代と共に言葉の変化は当然起こる事だが、今一番気になるのは日本語の省略であり、もっと困るのは外来語との混成である。ある外国人は日本語は難しいといっている。

それは省略された言葉が次々と造成されるからであるという。

文章を扱う者のよくよく考えるべきことなのであるとおもう。(鈴木和雄)

原稿募集

第三五号の原稿を募集します。〆切は、一九八六年九月三十日、要領は次の通りです。四百字詰原稿用紙で、論文三〇〜三五枚、随筆六枚、書評3〜6枚程度。

原稿の返却は致しませんのでコピーをおとりください。

一九八六年六月三〇日 発行

日本文学誌要 第三四号

編集人 鈴木和雄

発行人 杉本圭三郎

東京都千代田区富士見二ノ
一七ノ一法政大学八〇年館

発行所 法政大学国文学会

電話〇三(264)九七五二

印刷所 新日本印刷株式会社
東京都新宿区市ヶ谷本村町二七